

異世界マンガ作画大賞 課題作品4（女子向け）

◆概要

大正時代風の和風世界、帝都が舞台。吉原・遊郭で下働きとしてこき使われていた元華族令嬢・撫子（なでしこ）は、遊郭で女を抱かない女嫌いの実業家から「結婚契約」を持ちかけられる。

◆キャラクター設定（下記3名のキャラクターデザインを作成して下さい）

○名前：白河 撫子（しらかわ なでしこ）

年齢：17歳 身長：156センチ 体重：48キロ

髪型：黒髪ロング 顔の特徴：可愛い系 服装：粗末な着物

元華族令嬢。最愛の父を亡くし、家督を狙う義兄から結婚を迫られて逃げた末、遊郭・萬華楼のNO.1花魁に拾われる。下女として働いているが周りの遊女からは「穀潰し（ごくつぶし）」と呼ばれ冷遇されている。17歳まで箱入り令嬢だったため、恋愛ごとには鈍感。

○名前：乾 慧（いぬい けい）

年齢：24歳 身長：175センチ 体重：65キロ

髪型：黒髪 顔の特徴：綺麗系 服装：三つ揃いのスーツに白い手袋

（鉾山・造船・金融・倉庫・地所などを手掛ける）乾商会の御曹司。イギリスに留学していたが、乾商会を継ぐ前に祖父から「信用のためにも身を固めろ」と命じられて帰国中。不仲だった両親の影響で家族愛や恋愛に懐疑的で、世の中に対してやや冷笑的。酒はザル。どれだけ飲んでも顔に出ないが、撫子に対して顔が紅くなると「酔った」などごまかす。

○夕顔（ゆうがお）：年齢23

萬華楼の下層の花魁。撫子とは対照的に肉感的な体つき、派手な柄の着物を着崩している。勝気で自信家だが上客がつかずNO.1になれないことを不満に思っている。下働きなのに突然、慧という上客に指名された撫子を敵視していく。

◆背景参考

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E9%81%8A%E5%BB%93>

◆課題小説

(以下から一部シーンを抜粋して、マンガ 4-8P 分の完成原稿を仕上げてください)

○遊郭：営業開始の頃（18 時頃）

吉原中の妓楼に灯がともり、華やかな夜の街の雰囲気。

遊女たち、身支度を整え、張り店できゃっきゃと雑談している。

粗末な着物を着た撫子、入り口の隅で板の間の雑巾がけをしている。

楼主、パンパンと手を叩いて遊女たちを黙らせる。

楼主「おまえたち、今日は乾商事の若専務がいよいようちにお見えだよ」

遊女たちの中から一番に食いつく夕顔。パッと顔を輝かせながら。

夕顔「それってあの英国帰りの？ 接待で連れて来られても馴染みを作らない、女嫌いつて噂の乾慧様かい？」

声が聞こえて不安そうな表情になる撫子。

撫子（乾商事といたら、帝都でも有数の企業だわ）

撫子（乾慧さま……もしかしたら華族にも知り合いがいる方かも）

撫子（私は関わらないようにしなくちゃ）

夕顔、胸を強調しながら、自信満々の顔つきで。

夕顔「本当に女が嫌いな男なんているもんか。絶対にわっちが口説いてやる」

慧、取引先男性と暖簾をくぐって現れる。

英国帰りだけあり、三つ揃いのスーツがよく似合っている。

手には白い手袋。

その場の全員が見惚れる。特に夕顔は、慧の美しさに言葉を失っている。

撫子は視線が合わないようにぱっと顔を伏せる。

楼主、手もみしながら。

楼主「乾様、どの娘をおつけしましょう。うちは上玉揃いですよ」

慧、華やかな容姿とは裏腹に、冷たくそっけない態度。

慧「酒と部屋だけ用意してくればいい。仕事をする」

慧（仕事上断り切れずに連れて来られてしまったが、おしろい臭くて窒息死しそうだ）

空気の読めない夕顔、慧の腕にしなだれかかる。

夕顔「そんな無粋なこと言うもんじゃありません」

慧、反射的に振り払う。

慧「――！」

よろける夕顔。隅にいた撫子にぶつかってしまう。

夕顔「いたっ！」

夕顔、同情を引こうと大げさにしなを作る。

夕顔「痛うござりんす〜。乾様さすってくんなまし」

撫子、演技を鵜呑みにして慌てる。

撫子「す、すみません夕顔姐さん。お怪我は――」

夕顔、睨みつけながら小声で。

夕顔「あんたじゃないよ！」

慧、そのやりとりで撫子の存在に気がつく。

慧、驚いたように目を細めて撫子を見ながら。

慧「その娘は？」

夕顔、笑いながら。

夕顔「これははただの下働きで、礼儀も何もあったもんじゃない小娘ですよ」

慧「いい。酒はその娘に運ばせてくれ」

撫子「え――」

撫子（ど、どうして……）

慧、下男に連れられて二階への階段を上っていく。

呆然と見送る撫子。

夕顔、悔しそうな顔で。

夕顔「なんであの穀潰しが（選ばれるの）？」

楼主、撫子の鼻先に指を突きつける。

楼主「撫子、おまえは下働きだが、（床入りを）望まれたら拒むなよ」

楼主「本来ならおまえがお相手できるような方じゃないんだ。万が一粗相でもあったら追
い出すから、そのつもりでいろ」

撫子、青ざめる。

○遊廓 接待部屋

飾り棚や屏風などが置いてある。

隣の部屋には布団が敷いてある。

普段遊女が使っている朱塗りの華奢な文机を使い（男性はあぐらで使うような低い机）、猛然と書類をめくっていく慧。室内でも手袋はしたまま。

酒を運んで来た撫子、目を通した書類がどんどん積まれていくのを見て呆気にとられてしまう。

慧、撫子のほうを見もせずに。

慧「酒だけ置いて戻っていい。なくなったらまた呼ぶ」

撫子（本当に……？）

いくらお客様がいいと言ったところで、ほったらかしにするわけにもいかない。

撫子、おそるおそる慧の顔をうかがい、ふと気がつく。

撫子（あまり顔色が良くないみたい）

撫子、うさぎ型に切った林檎を、楊枝を添えて慧に出す。

慧、初めて顔を上げる。

撫子、三つ指をついたまま。

撫子「どうぞお召し上がりください、乾さま」

慧、可愛らしいうさぎ林檎の皿を手にして、眉根を寄せる。

慧「これも吉原の手練手管か？」

撫子、びくっとおびえたように肩を震わせる。

慧「余計な真似はよせ。一番おしろい臭くない女を仕方なく付けたまでだ」

慧「女を抱く気はないし、この店にも二度と来ない」

再び書類仕事に戻る慧。

撫子（乾さま、本当に吉原も女性もお嫌いなのね。でも――）

仕事で身体を壊した父親を思い出し、なにか食べて欲しい撫子。

撫子「私は、遊女ではございません。ただの下働きです」

撫子「お体を壊せば、却ってお仕事に障ります。これなら、お仕事しながらでも手が汚れないかと」

撫子「どうか——」

慧、面を上げる。

慧（遊女ではない——手練手管ではなかったのか）

慧、やや気まずそうな表情で。

慧「……まあ、確かになにも口にしていなかったし、まさか毒が盛られているということもないだろう」

慧、ようやく一口しゃりっとかじる。

撫子、その音で面を上げ、ほっとした様子で胸に両手を当てる。

撫子「良かった——」

撫子（お父様も、いつも食事を忘れるくらい忙しくしていらした。それでお体を壊してたから——）

慧、その様子に驚いて目を瞠る。

慧（本当に俺の体を気遣って？）

撫子、慧が自分を見ていることに気づき、再び縮こまって俯く。

俯いた拍子、床に置かれた書類にふと気づく撫子。

撫子「——綴（つづ）りが」

慧「綴り？」

慧、書類を手に取り、英語のスペルミスに気がつく。

慧「英語が読めるのか？」

撫子「い、いえ」

撫子（いけない、つい）

撫子N お父様は外交官だったから、子供の頃数年英国で暮らした

撫子N でもそれは知られちゃいけない——

撫子「……硯（すずり）と申し上げました。お使いになるかと」

慧、使っていた万年筆を弄びながら。

慧「硯？」

慧（下手な言い訳だ）

慧（英語が読める下働き、だと——？）

慧、どういうことだと思案しながら鋭く聞く。

慧「お前、ここに来る前は、どこに？」

撫子、青ざめてびくっとする。

撫子（ごまかさなくては）

撫子「ええと実は……覚えていないんです。行き倒れていたのを、花魁に拾っていただいて……」

慧、縮こまる撫子をまじまじと見ながら。

慧「行き倒れ？ 記憶がない？」

撫子「はい」

慧「そんなことがあるものか？」

撫子「……本当に、身の上のことはなにも」

慧、顎に手を当てて考え込む。

慧（記憶のない娘……）

慧（下手に令嬢を妻に迎えば、家同士の付き合いが面倒になる）

慧（その点、この娘なら）

慧「客も取らず、性根も悪くない。そして品と学がある。犯罪歴だけあとで調べるとして……」

撫子、ぶつぶつ言い始めた慧を不思議そうに見つめる。

慧（この娘にとっても、悪い話じゃないはずだ）

慧、自分の思いつきに満足して、口の端でちょっと笑う。

慧、撫子の瞳を見つめながら問いかける。

慧「おまえ、俺と契約結婚しないか？」

撫子、呆気にとられる。

撫子「けいやく……けっこん……？」